

民俗文化と〈ユビキタス〉の概念¹⁾

Folk Culture and the Concept "Ubiquitous"

河野 眞

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper is based on a presentation made at the 3rd Symposium of Chinese and Japanese Folk Culture held 16th through 19th August 2004 at Liu-Ku town in the Li-su minority Autonomous District of Yunnan province, China. The paper deals with the problem facing folk studies when applied to the situation existing today. Attention was first drawn to the problem in the early 1970s by the folklorist Hermann Bausinger when he referred to the 'Ubiquität' of 'Folklorism'.

When in the early 1970s the folklorist, Hermann Bausinger used the term 'Ubiquität' of 'Folklorism' he drew attention to widespread recognition of the need for a term to describe a traditional culture that had been modified. The term he used corresponds to the term 'ubiquitous society' that is currently in vogue now three decades later. Recently, this latter phrase as used in America and Japan on the Internet has both a time and spatial (geographic) connotation, whereas the Latin term has only a spatial connotation. Needless to say the world today is full of computers. The hypothesis that the folklore is ubiquitous contrasts sharply with the notion that folklore in the modern world is disappearing. The term 'folklorism,' which began to be used in academic folklore circles in Germany during the 1960s recognizes that folk culture today is a performed tradition rather than a lived tradition.

The variety of activities we experienced in Yunnan province largely come under this category. On that occasion, the people of the district performed a series of attractions to welcome us guests from Japan. In all we were about forty people, mainly folklorists. Some of us felt that the performances in the village square and on the stage of public halls cast a chill over the proceedings because they were artificial arrangements of village life and were not *per se* primitive customs, anymore than the fair itself was. Sociologists, anthropologists and folklorists from around the World had met in this remote and most westerly region of Yunnan province in the 1920s. Many of the concepts investigated then, have survived in such catchphrases as : 'treasury of primitive nature', and 'full of living fossils'. Officers of the regional

government still refer to these terms when talking to visitors from abroad following the many overlapping waves of modernization over the last few decades. To understand what has actually been happening *in situ*, it will be more effective to study 'Current Folklore,' than to do folk study in the conventional way. This is a new branch of folklore study with its own points of view, methods of research, and it concerns itself with the modified folklore that has superseded traditional folk life almost everywhere. Not only are the performances of this modified folk life thereby enhanced, but so are the lives of the people involved as they respond in different ways, whether fascinated or disappointed. So the study of 'folklore' as experienced in western Yunnan elucidates in its own way what prevails in the wider world.

1. 現代社会のなかの民俗

最近の話題から

'ubiquitous' という言葉は耳馴れないかもしれませんが、日本ではこのところ〈ユビキタス〉という言いかたで流行語になっています。これに因んで最近の話題を挙げれば、今年の6月29日に国立国語研究所によって恒例の流行語対策が発表されました。よく耳にする外来語とその日本語での表記の基準が示されたのですが、〈ユビキタス〉も検討の対象になりました。もっとも、当面はカタカナ語での通用に委ねて今後の推移を注視することになったようです²⁾。この〈ユビキタス〉の語は、日本の通産省がIT化による次世代社会に〈ユビキタス〉の呼称を当てたことによって日常語への道を踏み出したのです。その語を用いるという思いつきはアメリカですが、日本での定着は、日本の情報社会システムの推進者として知られる坂村健氏の提唱によるところが大きいようです。同氏は昨年、NHKの教養番組「人間大学」で「ユビキタス社会がやってきた」という連続講演を行なっています³⁾。ラテン語の原語 'ubique' は空間的な意味で、時間の軸は含まれませんが、日本では、〈いつでも、どこでも〉、つまりコンピュータ機能が生活の隅々まで行き届くことを指しています。事実、最近では、新聞紙面でも完全IT化の〈ユビキタス・マンション〉の広告が載っていたりします。

1) 本稿は、2004年8月16日から19日まで中国雲南省怒江州六庫で開催された第3回中日民俗文化国際学研討会（主宰者は李子賢雲南大学教授）での発表である。

2) 発表の内容は、翌日の新聞各紙によって報道された。言い換えが便宜的とされた「外来語33語言い換え」には、public involvement（住民参画）、safe guard（緊急輸入制限）、digital divide（情報格差）、domestic violence（配偶者間暴力）、informed consent（納得診療）などがある。他方、〈データベース〉、〈オン・ライン〉、〈メセナ〉などはカタカナ語が分かり易いとされた。また、〈いつでもどこでも様々な情報を入手できる〉のと意味で用いられる〈ユビキタス〉は適当な言い換え語が見つからないとして、今後の検討課題となった。

3) 坂村健 2003年『ユビキタス社会がやってきた一人とコンピューターの未来』NHK「人間講座」のテキスト NHK出版；また同氏の次の著作を参照、坂村健 2002年『ユビキタス・コンピューター革命 一次世代社会の世界標準』角川書店。

ユビキタスの概念

しかしコンピュータがここでのテーマではありません。‘ubiquitous’ という言葉が民俗学の分野でも早い時期に提唱されていたことに因んで、現代フォークロアの問題性を考えてみたいのです。ドイツの民俗学者ヘルマン・パウジンガーは『科学技術世界のなかの民俗文化』(1961)によって知られていますが⁴⁾、1971年に刊行した民俗学の概説書のなかで、‘Folklorism’を取り上げ、それが空間的に普遍的であることに注意を促して、〈ユビキタス〉の語を用いたのでした⁵⁾。そのときはドイツ語の名詞形‘Ubiquität’でしたが、英語の‘ubiquitousness’でも同じことです。注目すべきことに、これらは英語でもドイツ語でもあまり日常的な言葉ではありません。それが今日の日本で流行語になっていることが面白いのです。次世代コンピュータシステムにこの名称を選んだ人々も、幾らかレベルの高い感じを与えるネーミングを狙ったと語っています⁶⁾。事実この語は、主に学術用語として使われてきた経緯があります。例えば、鉱物学では、特定の岩石組成が至るところに認められる場合、ユビキタスであると言うようです。またそうした学術的な用い方の基本になったのはキリスト教神学です。因みに、キリスト教は、万物に神が宿るといった考え方をしません。神は絶対的な超越者であって、人間も動物も植物も自然界一般も神そのものではありません。人間が神の力や息吹に触れるのは、極端に言えば、教会堂のなかだけなのです。その外側は、いわば神に見放された空間で、それゆえキリスト教では、教会堂内の儀礼、つまり典礼が非常に大きな意味を持ちます。しかしキリスト教のなかにも、神が至るところに存在するという見方はないわけでもありません。しかし万物に宿っているという意味ではなく、神が常に睨んでいるといことですが、それが神の‘ubiquitous’です。またそれを特に強調するプロテスタントの一派が偏

4) Bausinger, Herman. 1961. *Volkskultur in der technischen Welt*. Stuttgart. 筆者による次の日本語訳がある、ヘルマン・パウジンガー『科学技術世界のなかの民俗文化』(愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』別冊 ディスカッション・ペーパー No.2 2001年)

5) Bausinger, Herman. 1970. *Volkskunde. Von der Alttretumskunde zur Kulturanalyse*. Stuttgart.

6) 次のような背景の説明がなされている。〈このようなシステムモデルに「ユビキタス・コンピューティング」という名前をつけたのは、ゼロックス・バルアルト・リサーチセンターの故マーク・ワイザー (Mark D. Weiser) 博士です。実は、コンピュータ・サイエンス研究分野としてこのコンピュータ・モデルを最初に唱えたのは私なのですが、そのときに唱えた日本語は「どこでもコンピュータ」というものでした。何だか「ドラえもん」みたいで軽すぎるということから、「超機能分散システム」などとも言っていました。英語で書いた論文では、“Computing Everywhere”や“HFDS: Functionally Distributed System”など書いていました。……ただ、“Computing Everywhere”では中学レベルの英語ですし、HFDSではつまらない。そこに教養あふれるラテン語由来の「ユビキタス」という言葉が出てきたわけです。ネーミングが大事であることは、用の東西を問いません。重みのあるネーミングでないと信用されない。日本ではそういうとき昔は漢語が、現在ではいわゆるカタカナ語がよく使われます。欧米でもそういうことはあって、そこで出てくるのがラテン語です。〉坂村健 2004年2～3月期『ユビキタス社会がやってきたーコンピューターの未来』NHK「人間講座」テキスト pp.11-12.

在論者 (ubiquitarian) です⁷⁾。この言葉は、本来はそういう使い方をするのです。それがコンピュータ社会に応用されて、コンピュータは神の如く普遍的であるというのは、なかなか意味深長です。では、民俗学の場合はどうでしょうか。

フォークロリズム

そこでフォークロリズムがユビキタスであるという本論になるのですが、そのためには、フォークロリズムについて説明しなければなりません。‘Folklorism’は‘Folklore’の派生語で、1960年代にドイツの民俗学界で提唱されました⁸⁾。今日の世界では、民俗は昔通りに行なわれているのではなく、現代社会の脈絡を帯びたものにならなっていることを指しています。つまり伝統的な民俗が〈新しい状況のなかで新しい意味や機能を帯びて行なわれること〉で、民俗のそうしたあり方がユビキタスであると言うのです。言い換えれば、昔ながらのものとしての民俗は、今日では極めて限定的にしか存在していません。それどころか、過去と同じ意味、同じ機能をもった民俗は、もはやどこにも存在しないと言ってもよい位です。もっとも、必ずしもそうではないとの見解もあるでしょう。昔ながらの民俗と見えるものが、現在も健全な事例も無いわけではないからです。私たちも、そうした事例に接することを願って各地を訪ねています。事実、何百年も昔から変わることのない民俗行事を目の当たりにすることも不可能ではありません。しかし少し考えてみますと、そこには必ず現代社会に特有の脈絡が走っているはずで、その身近な例は、伝統的な民俗が観光振興に活用されている場合でしょう。この点は、中国においては積極的な姿勢がみられ、また民俗学のあり方という面でも特色となっているように思われます⁹⁾。

しかしもちろんそれだけではありません。アイデンティティ (identity) も、現代社会の中

7) A. リチャードソン/J. ボウデン 1995年「遍在 Ubiquity」『キリスト教神学事典』教文館 p.535. 昭和38年「キリストの遍在」『キリスト教大事典』教文館 pp.325-326.

8) フォークロリズムは1960年代にドイツの学界で提唱された概念で、提唱論文としては次がある。参照、Moser, Hans. 1962. *Vom Folklorismus in unserer Zeit*. *Zeitschrift für Volkskunde*. 58, S. 177-209.; Moser, Hans. 1964. *Der Folklorismus als Forschungsproblem der Volkskunde*. *Hessische Blätter für Volkskunde*. 55, S. 9-57. 後者には筆者の翻訳があり、またフォークロリズム概念の初期の展開については、次の拙論において解説をほどこした。参照、2000年「フォークロリズムから見た今日の民俗文化」『三河民俗』第3号 三河民俗談話会。

9) 中国民俗学の傾向として、民俗学が積極的に観光産業にかかわることを学問の目的のひとつとしている場合が見受けられる。例えば、日本の学術誌が企画した編集者を交えた鼎談のなかで、徐経澤教授 (山東大学社会学系) は民俗学の5つの課題の一つとして〈民俗旅游〉を発展させることへの関与を挙げている。参照、徐経澤・葉濤・松岡正子 1999年「新しい中国民俗学をめざして」愛知大学現代中国学会 (編) 『中国21』 Vol. 6, pp. 25-36, p. 30.

での民俗のあり方を考える上でのキーワードのひとつです。しかもその段階はさまざまです。国家という政治的な枠組と重なり、それゆえナショナリズムと触れ合うこともあるアイデンティティ。国家のなかのより小さなグループのアイデンティティ。少数民族のアイデンティティ。省や州や県や市町村のレベルでのアイデンティティ。そうかと思うと、逆に国家や民族よりも更に広い、ほとんど無限に広がる枠組みがはたらくこともあります。地球市民という自己認識、また世界や人類全体に〈ふるさと〉や仲間を見る場合のアイデンティティもあります。もっとも、〈ふるさと〉という概念は、頻繁に口にされるものの、今日それが意味するものは虚実がないまぜになった複合観念という面があり、むしろ現代社会の産物であることには注意をすべきでしょう¹⁰⁾。また〈ふるさと〉や伝統文物が発揮する吸引力は、今日ではさらに大きな展開を見せてもいます。民俗事象は狭い地域での特色であるはずですが、今日では例えば〈世界民俗祭〉と銘打つような催しも珍しくはなく、しかもそうしたイベントに接しても、私たちもさして違和感を覚えません¹¹⁾。狭域的であることを特質とする民俗と、民俗的要素がイベントなどの形をとって広く一般社会や全世界に対して影響力をもつ

10) 民俗研究者が〈ふるさと〉の語を用いることは少なくないが、その意味内容の考察はなお微弱である。しかし〈ふるさと〉が近・現代の複合観念であることは認識されつつある。民俗学の分野での〈ふるさと〉概念の検討は別の機会に譲り、ここでは、民俗学の外部での注目すべき考察として次の成果を挙げておきたい。参照、猪瀬直樹 1990年『唱歌誕生 ふるさとを創った男』日本放送出版協会。(2002年 猪瀬直樹著作集9 小学館)。これは高野辰之と岡野貞一による唱歌「ふるさと」の成立過程を中心にあつかったノンフィクションである。また〈ふるさと〉概念の多義性を民衆史の側から観察したものでは次を挙げる。参照、色川大吉 1988年「故郷の精神史—庶民の「ふるさと」観から」初出：『春秋生活学』第3号 小学館。(今日では次に収録されている、色川大吉 1990年『昭和史世相篇』小学館 pp. 153-168.)。

11) 先に挙げたインタビュー(注9)のなかでは、山東省濰坊市が山東省旅游局と協力して、地元の伝統行事を基礎に「国際風箏大会」を1984年4月に開催し、以後も毎年多くの観光客をあつめていることを成果として紹介している。この場合にも、狭域的な伝統行事と国際的なイベントとの間に違和感は差しはさまれていない。またこうした傾向の大規模なイベントとしては、最近では韓国の江陵(江原道)で開催された「2004国際江陵観光民俗祭」(2004 Gangneung International Folklore Festival)を挙げておきたい。同地域では祖霊祭祀と稲作儀礼の伝統的な形態が維持されてきており、それらは〈端午祭〉を名称としてきた経緯があるが、それを核にして数年前から新たなイベントが試みられている。参照、同イベントのパンフレットならびに広報用DVD;しかし日本においても、民俗研究者が民俗要素を採り入れたイベントの企画に多少とも関わっている事例は決して少なくない。同種のものから一例を挙げると、埼玉県嵐山町のWeb siteには、鎌倉時代の武将畠山重忠が同町付近を拠点としていたとされるところから、「重忠力石大会」の案内が写真と共に掲載され、そこにはイベントが埼玉県立歴史資料館によって企画されたことが明記されている。(重忠の怪力ぶりは……鎌倉の永福寺で庭園造りの際に3mあまりの巨大な石を持ち上げた話などはとても有名です。重忠ゆかりの菅谷館跡では、この重忠の怪力にちなんで、県立歴史資料館の主催で平成8年から「重忠力石大会」が行われるようになりました。11月14日の県民の日には子供から大人まで、大きな石を持ち上げて力自慢を競いあいます。)(発信：埼玉県嵐山町 Aug. 04, 傍点は引用者による。)

こととの関係については、改めて考察を加える必要がありますが、その検討の土台になるのは、民俗の分野で起きていた構造的な変動に私たちがいつしか順応していた事実を自覚することなのです。

課題

そこで改めて、民俗の変質とは何であるかと問うてみます。民俗がかつての形態ではなくなることを以って〈偽もの〉と見る考え方もないわけではありません。民俗学史を振り返れば、1950年代からしばらくのアメリカでは、そうした理論が影響力をもったことがあります。すなわち、民俗が伝統的な形態のまま行なわれているのと、近・現代の好みに合わせて改変し、ビジネスにまでなっている形態とを厳しく区別し、後者を偽ものとして批判するという行き方です¹²⁾。そうした見解は民俗学の発達の中なかでは、一度は出てくるもので、それはそれ重要な考察も含まれますので、一概に斥けるわけにはゆきません。しかし、仔細な観察が進み、民俗をめぐる現実が複雑なものであることが分かってきますと、そうした二分法は素朴な認識で、現実を説明し切れるものではないことが分かってきます¹³⁾。

事態を率直にみつめるなら、民俗が昔ながらのものであり続けることは、現実には不可能なのです。さらに言えば、そうした〈本もの〉を想定すること自体に無理あることとなります。もとより伝承に忠実な保存も行なわれてはいますが、過去において民俗や伝統行事を成り立たせていた脈絡まで併せて保存することは、そもそも出来るはずがありません。〈保存〉は、伝承形態に忠実な場合でも、精々、正面の見せ場を対象にしているにすぎません。とまれ、研究者の期待や失望とはかかわりなく、民俗は変化し変質してゆきます。その変化や変質の背景ともなり、原因ともなっているのは、社会の一般的な動向です。民俗を民俗でなくしてしまい、新しい意味と機能に変えてゆくもの、すなわちフォークロリズムを促すのは、一般社会であり、それゆえフォークロリズムは〈ユビキタス〉なのです。

12) Richard M. Dorson が〈偽物の民俗〉を指す語として〈fakelore〉の造語を行ない、その後も考察を重ねたことにより、民俗の本物・偽物の区分は1950年代から70年代に至る時期にアメリカ民俗学の重要テーマになった。ドーソンの次の諸著作を参照。Dorson, Richard M. 1950. *Folklore and fake lore*. *American Mercury*. 70 p. 335-343.

Dorson, Richard M. 1969. *Fakelore*. *Zeitschrift für Volkskunde*. 65 pp. 56-64.

Dorson, Richard M. 1976. *Folklore and Fakelore*. *Essays toward a Discipline of Folk Studies*.

13) 民俗の本物か偽物かという単純な二分法で区別することには次の批判がある。Kirshenblatt-Gimblett, Barbara. 1988. *Mistaken dichotomies*. *Journal of American Folklore*. 101, pp. 140-155. なおこの論考は「誤りの二元論」として次のアンソロジーに収録されている。参照、岩竹美加子(編訳)1996年『民俗学の政治性—アメリカ民俗学100年目の省察から』未来社 p. 253-281. また同じ論者による次の論考も参照。Kirshenblatt-Gimblett, Barbara. 2000. *Folkloristics in Public: Reflections on Cultural Brokerage in the United States and Germany*. *Journal of Folklore Research*. 37.

こうした状況は、民俗の関係者それぞれに独特の課題を投げかけています。民俗の研究について言えば、民俗の変質を必然的としている社会的な諸要素を射程におくことが求められるでしょう。そうでなければ、現実の推移を正しく理解することにはならないからです。現代社会の動向と民俗とのかかわりを解明するには、単純な区分ではなく、社会の動きのさまざまな契機に注目し、また諸契機の相互関係にも目配りしながら、検討を積み重ねてゆく必要があるでしょう。

II. 雲南省怒江傈僳族自治州への旅と現代フォークロアへの刺激

現代フォークロアの視点から

以上は、民俗学が現代社会について追っている課題に一般的に目を向けてみたのです。次に、今回の学術大会の開催地でもある雲南省に言及したいと思います。私は当地については専門的な知識をもっていませんが、ここでの数日間の経験は、現代フォークロアにとっても十分に刺激的でした。それゆえ印象を述べるに過ぎないのですが、それには目的があります。それを通じて、フォークロアのなかでも未だ新しい視角からの考察である現代フォークロアとはどういうものであるか、とりわけ何を問題にする種類のものであるかを知っていただきたいと思うのです¹⁴⁾。

今回の「第三回中日民俗文化国際学術研究シンポジウム」は開催地が怒江傈僳族自治州の中心地である六庫鎮であるため、雲南省の西辺の豊かな自然と文物に接することができたのですが、僅かなりともこの土地にふれたことによって、民俗の伝統的な形態ではなく、むしろ民俗学の現代の課題を考えさせられるところがあったのです。また、今回の大会の主宰者である李子賢雲南大学教授が、この地方の民俗の変遷とそこで民俗学に課せられて課題を論じておられるのは、心強い指針となりました¹⁵⁾。それでもなお私の印象が実情と合致してい

14) 現代フォークロアの英語表記は 'Current Folklore' であるが、この表現自体は 'folklore' が二義を持つことに対応して、〈現代民俗〉と〈現代民俗学〉の二つの可能性がある。現代フォークロアは、民俗的な要素を含む諸現象の現代社会の有機的な一部と見ることを特徴とする。基本的な理論ではドイツの民俗学界に、次いでアメリカの民俗学に見るべきものが多い。上記のヘルマン・パウジンガーはドイツから輩出した代表者として知られており、1970年代以降、アメリカの学界にも影響をあたえた。またそれに先立ってオーストリアの代表的な民俗学者 Leopold Schmidt が〈現代民俗学〉(gegenwärtige Volkskunde) を提唱し、1960年代にウィーンに同名の研究所を設立したことにも言及しておきたい。

15) 曾徳称・李子賢(主編)2002年『雲南 民俗文化形態与現代化—楚雄民族文化考察報告』成都:巴蜀書社の基調報告に当たる「建設楚雄民族文化強州諮詢報告」の策画に加えて「雲南少数民族传统文化保存教育急議—以怒江峡谷諸民族為例」(pp. 41-53), 1963年から最近に至るまでの同地域でのフィールドワークを踏まえて現地の変遷がまとめられている。また同書に収められた論考はいずれも現代化のなかでの民俗文物の諸問題をあつかっており、裨益するところが大きい。

ないところがあることが危惧されますが、それらについては識者の方々の御教示をいただければと願っています。

秘境と〈生きた化石〉

大会が実現するにあたっては、自治州政府の幹部の方々の尽力があったことは言うまでもありませんが、その方々が開会の式辞や歓迎の宴において述べられ言葉のなかに、印象に残るものが幾つかありました。それは、この土地が〈秘境〉であり、それゆえ自然環境において魅力的であるだけでなく、文化的、特に民俗学に関心のある者にとっては〈活化石〉でもあるとの紹介です。たしかにこの地方は〈三江並流〉、すなわち怒江（サルウィン川）、瀾滄江（メコン河）、そして長江の大きな支流錦沙江の三大河川の上流地帯として特異な地勢と動植物の宝庫の故に世界自然遺産に認定されています。それゆえ〈秘境〉のキャッチ・フレーズは当然のことでしょう。またそうした辺地のゆえに人文の分野でも掛け替えの無い習俗や文物に富んでいることも想像に難くありません。事実、多くの少数民族の人々が暮らしています。もっとも、〈生きた化石〉という言い方には、率直に申せば衝撃を受けました。日本語では、社会現象や人間の行為についてはそういう表現はあまりなされないからでもあります。それだけに印象は強烈でした。とまれ、ここが独特の豊かな民俗の土地であることは紛れもない事実です。しかし私たちが出会ったのは、やや趣の違ったものでもありました。

演出された民俗

私たちは、シンポジウムの初日の後、六庫鎮の工人文化宮に招待され、その礼堂の舞台上で民俗芸能が演じられるのを見学しました。民俗衣装も現代的な伝統を取り入れながら現代のセンスを実現したもので、演目も、伝統的な祭り行事や労働のなかの特徴あるしぐさを要領よく取り合わせた創作でした。また二日目は、この地方一帯の民俗衣装の披露によってもてなされたのですが、それに先立ってファッション・ショーも開催されたのでした。スポンサーの煙草産業の紹介があり、点数をつけるための用紙も配布されて、地元の行政者たちとともに私たちもショーの審査に参加するという趣向でした。地元と主催者の歓迎のほどはこれだけでも明らかで、強い感銘を受けたものです。もっとも、その感銘のなかには、民俗が現代に生きるすがたを目の当たりにしたことへの感慨も混じっています。

そうした見聞は、舞台上だけのことではありません。3日目に私たちは、六庫鎮からバスで2時間はなれた山奥の新建村へ案内されました。そこでは村人たちが、地酒をつくり、豚や鳥を料理して歓迎してくれました。さらに広場には、催し物の準備が整っていました。広場の正面には、ステージが仮設され、そこに民俗衣装の男女がライトに照らされてされ居並び、マイクを前に次々に歌をうたってくれました。それだけでなく、広場には、高い梯子が天に向かってそそり立っていました。傍には薪が積まれています。よく見ると、

その梯子の踏み板は刀で、しかも刃が上を向いています。それは〈上刀山、下火海〉、つまり〈剣の山に上り、火の海に下る〉という行事を特別に実現してくれたのです。事実、歌謡が終わるとひとりの男性が、その剣の梯子を上ってゆき、頂で仕草を見せたのです。薪の山にも火がつけられ、やがて燃え静まった頃、消し炭が夕闇のなかに赤々と燃えているなかを男たちが踏み踊るのです。実にこの行事は、ちょうどその前日に、ステージの上で舞踏劇として演じられたものでもありましたので、ことさら印象深いものがありました。

私たちはこのようにして歓迎されたのですが、これは、日本から訪れた民俗学の研究者たちの期待と微妙にずれていたようです。シンポジウムに参加した日本人研究者のなかには、雲南省のなかでも特に辺地とされる地方での古い民俗への期待があり、事実、なるうことなら村の古老に接して民俗の実際に触れたいとの願望を口にする人もいたくらいです。

しかしここに、現実と民俗学のすれ違いがあると言えます。私たちが怒江流域で見聞したものが現実そのものなのです。私たちが現代社会のなかにいるように、世界のどの地域も現代社会の有機的な一部であるはずです。

民俗の現代化の過程

もちろん、今日の状況に至るには幾つかの階梯はあったでしょう。李子賢教授によれば、先生がはじめてこの地方の調査をされた1963年には、昆明から麗江を経て高黎貢山へ至るには、自動車から騎馬に変え、さらに徒歩で行くしか方法がなく、それには一月間を要したとのこと。福貢からチベットの境まででも十日を費やされたそうです。たしかにその当時なら、古い民俗がそのままの形で残っていたかも知れません。そうした変遷について、李子賢先生は幾つかの指標を挙げておられます。すなわち、清末にはこの地方の民情は〈太古乃民〉と称されるほど一般の文化的状況から距離があったこと、それゆえ1920年代には〈世界罕見的民俗文化宝庫〉として雲南省の少数民族地域は国内外の社会学、人類学、民俗学の研究者たちの強い関心を惹きつけたこと、そして1950年代に現代社会に向かう最初の大きな変化に見舞われたこと、などです。またその後、先生が3回の調査をおこなわれる度に大きな変化が認められたとされています。現代化が何度かの波動をつくりながら進化した過程は、とりもなおさず〈民俗活動や宗教祭祀〉が簡化・減少・消亡・萎縮を闊してきた過程とされます。先生が挙げられた事例を引きますと、2000年8月には新建村には創生神話を語ることのできる古老は一人しかいず、しかもその口承の実際は、1950年代に採録されていたものの一部が伝承されているにすぎなかったとのこと¹⁶⁾。

李子賢先生の手厚い研究の片鱗をここでの考察の手がかりにさせてもらったのですが、ま

16) 李子賢「雲南少数民族传统文化保存教育急議——以怒江峡谷諸民族為例」p.47.

たこうした変化が浸透するにあたっての直接的な手段の一部は、誰にも分かる形で目に見えています。山峡をどれほど奥深く入ろうとも、電柱が立ち、電線が走るのがその第一です。それによって種々の電気製品の使用が可能になります。とりわけメディアの普及が結果する影響は甚大です。ラジオやテレビによる聴覚と聴覚を通じた世界の拡大は、人の意識に占める辺地の割合を極端に小さくしてしまったはずで、そして年に何度も山崩れも計算済みの地勢とは言え、アスファルトで舗装した道路がどこまでも続くのが第二です。六庫と昆明の間は、一日にバスが6便通じ、大理との間は4便とのこと。この二つの動脈の整備は行政の成果と言ってよいと思いますが、他方、それが生活の仕組にも意識にも根本的な変化をもたらしたことは言うまでもありません。どこまでも続く怒江の溪谷には、石積み、木造、時には竹の網代も含めて、さまざまな材質の家々が立ち、その造作自体、民族の違いや家産・収入の程度を表していると思われませんが、その多くにはパラボラアンテナが立っています。テレビの普及率は既に80パーセントを超えているとも聞きました。果たして、折からアテネ・オリンピックの真最中でしたが、電器店のテレビに群がる人の姿も見かけないのです。つまり、私などが子供の頃の日本よりもはるかに先を行っているということになります。さらに、町へ入れば、携帯電話で話をしながら歩いている若い男女の姿が眼に入ります。飲食店にはコカコーラの紙コップの赤い色彩が鮮やかです。村の路傍に、おやつ菓子や飴やウェハスや香辛料や洗剤や家庭医薬のカラフルな包装の使い捨てが泥をかぶっているのは、都会の悪弊の末梢神経がここへも充分とどいている証と言えるでしょう。福貢や丙中洛といった地理的には奥まった町でも、CDのラベルを華やかに繰り広げた店も開いています。洋品店の婦人ものは、大都会と基本的には変わりません。もちろんパソコンの普及も進んでいます。と言うことは、パリや北京や東京ともひとつなぎなのです。つまり現代社会の真只中にあることになります。

民俗学と現代フォークロアの間で

こうした状況のなかでの民俗学の課題とは何でしょうか。現代のアトラクションのなかに過去の文物を見出して、それを手がかりに過去を解明するという方法もそのひとつでしょう。一般に民俗学はそれを課題とすると考えられています。ここで挙げた例に沿って言えば、先ず仮設のステージの上での民謡です。民謡の研究家であれば、そのなかに古い種類の歌を見つけ、歌詞や曲を伝承文化として価値づけるでしょう。それは、〈剣の山と火の海〉の行事でも同じです。それは、勇壮というよりも、本来は、呪術的な性格のものであったと思われる。それゆえ、同じく剣の刃の上に乗って霊力の乗り移りの証とするシャーマンの儀式を連想させるのです。そうすると、東北アジアとの繋がりも想定できないではないことになります。この推測が当たっているかどうかはともかく、現実の事象を歴史的・文化史的な脈絡を解明する上でのインデックスとして重視するという行き方です。事実、そうした観点から民俗

要素に着目する研究者は多く、その成果が貴重であることは言うまでもありません。

これに対して、現代フォークロアの視点は、少し違っています。新建村の広場での合唱団による歓迎を例にとってみます。そこでは地元の民謡が中心でしたが、同時にイギリスやアメリカの歌も入っていました。因みにこの地方では数十年前からキリスト教の宣教師の活動がさかんで、今日では住民の大多数がキリスト教徒とのことです¹⁷⁾。合唱団も村のキリスト教会堂での指導と練習によって維持されていることが、欧米の歌が入っているひとつの理由でしょう。しかしまた、合唱団は、日本人の団体客を歓迎して、日本の歌もうたってくれたのです。その点では、キリスト教の浸透によると言うよりは、観光をも意識したアトラクションの意味合いが強いと見るべきでしょう。またその観点から改めて歌の種類に注目しますと、そこでは地元の歌が中心ではあったのですが、その中味はやはり演出の性格をもっていたというべきでしょう。と言うのは、僂僂族の村であるものの、僂僂語の歌だけでなく、独龍族、彝族など、隣接する他の少数民族の歌も順番に披露されたからです。現代フォークロアの視点からは、そうした合唱の全体が意味するものが問題になります。言い換えれば、地元の歌の伝承としてよりも、伝承文化財を取り入れた企画であることに重点を置くのです。また、企画と効果、またその受け手である聴衆や観客にも注目して、両者のあいだにいかなる脈絡が走っているかを考察するのです。

〈剣の山〉の行事も同様で、考察における主要な着目点は、それが観光客を前に行なわれるアトラクションであることにあります。現実に行なわれている事象を過去の解明のための手がかりとして評価するのではなく、現実をそのまま受けとめて、その意味を問おうとするのです。私たちが見聞したのは、民俗そのものではなく、民俗の要素を活用したアトラクションですが、だからとてそれは偽ものでも希薄なものでもありません。それゆえ、演技が、公民館のステージで演じられるのと、村の広場であることの間にも本質的な差異はないことになります。事実、〈上刀山〉は、雲南省政府の観光関係の部局によって製作された広報書にも紹介されています¹⁸⁾。今回の場合は、〈剣の山と火の海〉は、最初は歌舞劇の一コマとして、次には村の広場で、実際の行事の再現として行なわれたのですが、それは本質に大きな差異

17) 次の文献を参照、銭寧 1998年「基督教在雲南少数民族中的傳播影響」王筑生（主編）『人類学与西南民族』昆明：雲南大学出版社 pp.240-266。雲南省でのキリスト教の布教の歴史を19世紀後半から1980年代まで概観しながら、少数民族の社会と生活様式に与えた影響があつかわれている。特に僂僂族地域に関する記述としては、現今では住民の80%近くがキリスト教徒であること、またキリスト教の布教が、以前は極めて多数に上った文盲の激減に大きな役割を果たしたことなどへの言及がみられる（p. 257-258）。

18) 写真の出典は、李禄安・范人（主編）『秘境旅游 A Tour to the Mysterious Land of Yunnan』中国雲南省旅游局、p.109.; なお、雲南对外宣伝品制作中心（編）2001年『雲南旅游大全』雲南美術出版社 p.107. にも同様の写真が載せられているほか、日本で刊行されている旅行案内でも珍しくはない。

は認められないのです。もし、その演技がかつて民俗が行なわれていた場所と重なり、それゆえに観客に与える感銘が大きいとすれば、それはきめ細かな演出であるとは言えますが、だからとてより本ものであることにはならないのです。

さらに重要なことは、民俗のなかには、そうしたアトラクション以外にはもはや存在しないものも少なくないことです。実際、民俗を、伝統的な生活慣習の個々の事象と考えるとすれば、なかには社会の仕組や生活環境の変化のなかで、もはや存続しようがないものも多いのです。それに、すべての民俗が今日から見て、消滅を惜しむべきものであるとは限りません。封建領主と領民の関係を背景にした慣習とか、医学知識を欠いているが故の呪術とか、貧困が生んだ歪んだ風習などは、消滅することはむしろ歓迎すべきもので、記録に留められておれば十分なのです。さらに、一時代のすべての民俗、あるいは大部分の民俗は相互に関連していたはずで、またその関連のなかにそれぞれの位置と意味をもっていたことを考えれば、その時代が過ぎれば、民俗の位置や意味はかつての通りではなくなってしまいます。それを勘案しますと、伝えられてゆくのは、過去の民俗のなかの一部でなのです。言い換えれば、選択的にしか伝わりようがないのです。もとより、古い文化の形態がすべて消滅することは好ましいことではなく、保存は大事なことです。そのさい、一般的な傾向を言えば、残され、残ってゆくのは、民族や集団の誇りになるもの、美しいもの、さらに何らかの意味で強い印象をあたえるものです。逆に、民族や集団にとって自慢できないもの、醜いもの、目立たないものは保存の対象から外れ、消滅してゆきます。もちろん、誇りや美や強い印象の基準が変動するものであることにも注意を払う必要はあるでしょう。さらに大事なのは、保存の意識が高まるには、社会が成熟する必要があることです。現代化は、先ずは過去の文物の破壊として作用します。社会が安定し、教育と生活水準が向上してはじめて、過去の文物への保存の意識が成長するというのが一般的な傾向です。またその段階に来たときに、保存運動のための適切な指針が提示されるかされないかは、その後の推移に大きく影響します。李子賢先生が、〈少数民族の伝統文化保存に向けての教育が急務〉であると説いておられるのは、少数民族を多く含む地域社会がその段階にあることを示していると共に、そこで必要とされる指針と言えるでしょう。

結 語

以上は民俗をめぐる催しものを現代の企画という面から検討してみたのですが、こうした事情を見渡した上で、一体何が起きているのかを問うのが、現代フォークロアなのです。何が起きているのかという問いは、過去がどうであったかではなく、現在を問うことに重点が置かれるということです。今の事例で言えば、過去の民俗を取り入れた企画とそれを前にした観客や訪問者と言う構図です。その企画が地元で成り立った経緯、そして観客や訪問客

がその場へ赴いた背景の両者を突き合わせる事ができれば、その構図が意味するものをより深く知ることができます。それには類型的なものから、独自色の強いものまでさまざまな関係が明るみに出るはずで、観光や学術調査もそうであり、型にはまったものから独創的なものまで多様な形態と内容が行なわれ、それぞれが社会の何かの表出となっています。企画し演じるものだけが表出者なのではなく、観客や訪問者もそれによって何かを表出しているのです。またそれによって、現代社会の有機的な一部をかたちづくっています。現代フォークロアとは、それらをひとつひとつほぐす作業を進めながら、可能な段階になれば理論化をおこなうことによって、現代社会の解明に資することを指すのです。

またこうした角度からの取り組みは、本来、民俗学には適したものでもあります。民俗学は、対象とする人々が持ち伝えてきた生活における独特の思考様式を共有し、共感するところ立脚点を定めるはずだからです。それゆえ自国文化を問うことに傾き、逆に異文化を不得手とするのですが、現代の様相に向かう方向においては、必ずしもその持ち味が発揮されていないというのが、少なくとも日本の場合には感じられます。またここでは〈観光〉という言葉を超えて余り使わないようにしたのも、これに関連しています。対象を観光に限定して考察すべきではなく、観光も含めて広く伝統的な要素と現代社会の相関を考える必要があるからです¹⁹⁾。今回の経験は、そうした問題を考える上でも刺激に富んだものでした。この序論のような考察は、そこから得た拙い成果なのです。

主要参考文献

- Moser, Hans. 1962. *Vom Folklorismus in unserer Zeit*. Zeitschrift für Volkskunde. 58, S.177-209.
 Moser, Hans. 1964. *Der Folklorismus als Forschungsproblem der Volkskunde*. Hessische Blätter für Volkskunde. 55, S.9-57.
 坂村健 2002年『ユビキタス・コンピューター革命 一次世代社会の世界標準』角川書店。
 Bausinger, Hermann. 1970. *Volkskunde. Von der Altreturkunde zur Kulturanalyse*. Stuttgart.
 曾徳称・李子賢(主編) 2002年『雲南 民俗文化形態与現代化 — 楚雄民族文化考察報告』成都: 巴蜀書社。
 王筑生(主編) 1998年『人類学与西南民族』昆明: 雲南大学出版社 pp. 240-266.

19) 日本でも〈観光民俗学〉という名称が提唱されており、そこでの成果も決して小さくはないが、そうした限定と民俗学の立脚点との関係を改めて問う必要がある。また人類学の一分野として〈観光人類学〉が提唱されていることにも注目すると共に、これに関しては最近の中国での〈旅游人類学〉の高まりと研究の厚みには注目すべきものがある。旅游人類学の分野では欧米の基本文献の翻訳紹介でも日本を上回っているが、こうした趨勢の起点となったものとして、1999年に雲南大学人類学系の王筑生教授の企画によって開催されたシンポジウムとその記録に注目しておきたい。参照、楊慧・陳志明・張展鴻(主編) 2000年『旅游, 人類学与中国社会』雲南大学出版社; なおこれと半ば重なる欧文の記録としては次の文献が刊行されているが、これは王筑生教授(1946-1999)への追悼論集でもある。参照、Tan, Chee-Beng, Cheng, Sidney C. H. and Hui, Yang ed. 2001. *Tourism, Anthropology and China*. Bangkok: White Lotus.

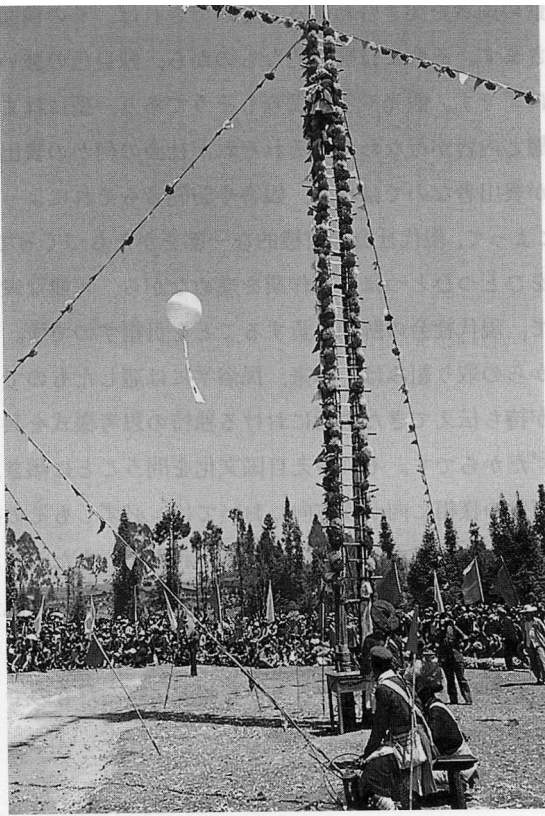


写真1 観光案内書に掲載された俵俵族 〈上刀山〉, 参照:(注18)

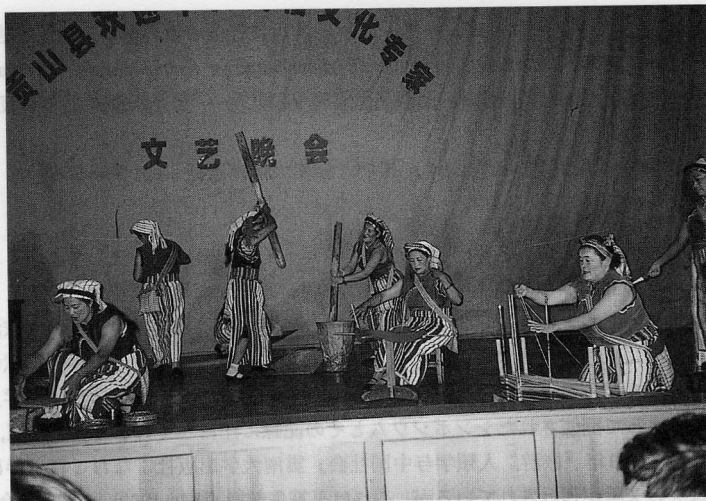


写真2 貢山での「文艺晚会」, 糸紡ぎ, 機織, 穀物の白揚き仕事など, かつての生活風景をとり入れた演出, 2004年8月21日, 筆者撮影